

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 2 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23510302

研究課題名(和文) 都市に生きるサマの民族誌 生業と信仰をめぐる選択の過程

研究課題名(英文) Living in the City: Livelihood and Faith among the Sama-Bajau Migrants in Davao City, Philippines

研究代表者

青山 和佳 (AOYAMA, Waka)

東京大学・東洋文化研究所・准教授

研究者番号：90334218

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、平成23年度から4年間に渡り、フィリピンのミンダナオ島ダバオ市の文化的少数者サマ・バジャウ社会を事例に、生業と信仰をめぐる選択の過程について民族誌を作成することを目指した。しかし、実施期間中に災害など予測できなかった出来事が重なり、研究計画を変更せざるを得なかった。ただしこの間、文献調査、過去に収集した資料の整理、火災直後の現地調査の結果などに基づき、論文公刊と口頭報告を行った。また、ボストン大学CURA所長のロバート・ヘフナー教授をメンターに得て研究の枠組みが発展したため、「研究計画最終年度前年度の応募」を行い、平成26年度に採択となり、新しい研究課題として継続する見込みである。

研究成果の概要(英文)：This four-year ethnographic research project starting in FY 2011 aimed to explore the process where cultural minority migrants choose livelihood and faith in the city, using a case study of the Sama-Bajau migrants in Davao City, Philippines. However, due to a series of unpredictable events such as a calamity that totally destroyed the researched community, the initial research plan had to be heavily modified; literature survey, review of the data collected in the past and a visit to the research site immediately after the calamity were done, based on which a few papers and oral presentations were delivered. Besides, during one-year fellowship (2013-2014) in the U.S.A., the author met Prof. Hefner, Director of the CURA at Boston U. as her mentor, which resulted in an enhancement of the framework for her research. Thus, she applied for a new project to continue this one in a changed context of the research site as well as in a wider framework, which was accepted by the JSPS in FY 2014.

研究分野：島嶼部東南アジアの経済と宗教

キーワード：東南アジア フィリピン 宗教 経済 キリスト教 ペンテコステ派 サマ人 都市

1. 研究開始当初の背景

本研究の着想における学術的背景として、(1)開発経済学における Amartya K. Sen による潜在能力・権原アプローチ、(2)東南アジアの先住民や文化的少数者と開発政策に関する研究、(3)申請者青山のミンダナオ島、ダバオ市の文化的少数者であるサマ・バジャウ社会の民族誌的研究が挙げられる。

2. 研究の目的

発展途上国住民の生活実態を分析し、貧困削減政策を遂行するに当たり、所得貧困指標や人間貧困指標は一定の有効性を有するものの、1)住民の価値観(信仰、信念、規範等)を包摂せず、住民を主に被援助者として把握する結果、住民自身の主体的動因の考察が不足しがちであり、また、2)それらが普遍的指標であるゆえに、各地域の文化的特性、とくに当該地域の文化的少数者の特性を十分把握できない。本研究では、フィリピンのミンダナオ島ダバオ市の文化的少数者であるサマ・バジャウ社会を事例に、貧困者は画一的に捉えられるべき救済対象者ではなく、価値観や文化に従った主体的選択により行動しているという基本仮説を立て、客観的指標、参与観察及びライフ・ストーリーによる民族誌の作成で検証する。これにより、経済生活と価値観の相互関係を動的に検討するための方法論及びそれを具体的に示すデータセットを提供することを目指した。

3. 研究の方法

本研究は定点観測で収集してきた一次資料をフィールド調査により発展的に最新化し、二次資料と合わせて分析を実施する民族誌的研究である。そのために4年間の研究計画を採用した。

ただし、以下の「4.研究成果」で述べるように、本研究課題は「研究計画最終年度前年度応募」に応募し、平成26年度採択となったため、研究方法も含めて、当初の研究計画を発展的に変更し、継続中である。

4. 研究成果

本研究は、「研究計画最終年度前年度」に応募し、平成26年4月に新たな研究課題「ペンテコステ派とパール行商 サマが経験する21世紀の仕事と祈り(課題番号26360001, 基盤(C),平成26年度~平成29年度)」として採択された。そのため、実質的には、研究継続中であるけれども、ここではそこに至るまでの中間的な研究成果と、新しい研究課題を申請するに至った経緯を記しておく。

当初の研究計画は、フィリピンのミンダナオ島ダバオ市の文化的少数者サマ・バ

ジャウ社会を事例に、貧困者は画一的に捉えられるべき救済対象者ではなく、価値観や文化に従った主体的選択により行動しているという基本仮説を立て、複合的調査法により検証するものだった。これにより、経済生活と価値観の相互関係を動的に検討するための方法論及びそれを具体的に示すデータセットを提供することを目指し、最終的に民族誌を英語と現地語で作成する予定であった。

平成23年度、平成24年度はすでに実施状況報告書に記したように、概ね順調に進展した。この2年間は、平成25年度に予定していた家族史調査のため、英語論文執筆及び講演・報告を通じてこの分野のフィリピン人研究者及び欧米出身の先行研究者と討論し(以下項目5の)、フィリピン地域研究・東南アジア研究・サマ研究における本研究の意義と独自性を確認できた。平行して、ダバオ市で調査対象の5家族を訪問し、過去の日本語著作の翻訳(英語・セブアノ語)の内容確認の準備をした。また、地域的文脈をよりよく理解するため、フィリピン再民主化過程に関する政治学の議論(とくに中間層と貧困層との接触領域を扱ったもの)を学び、ダバオ市発祥の社会運動に関する論文を書き(同)他に二重公共圏を論じた著作の書評も執筆した。

研究計画を発展的に変更する必要が生じたのは、平成25年度のことである。互いに関連する3つの理由から、継続課題の再構築により、継続課題で予定していた民族誌に加えて、グローバル宗教とローカル・ビジネスに関する別の民族誌を生み出せると考えたためである。

すなわち、(1)留学による家族史調査の延期: サマ研究の実績により、Harvard-Yenching Institute(HYI)のVisiting Scholar Programに合格、平成25年8月~翌年3月末の予定で在外研究に従事のため、家族史収集のための現地調査を最終年度(H26)に延期せざるを得なかった。

(2)改宗と家計を交錯させた分析枠組の発展: HYIでの研究生活を通じ、改宗に関する政治経済学(Robert W. Hefner 博士)の著作及び、家計内部の資源フローと意思決定に関する人類学的研究(Richard R. Wilk 博士)の著作等から、継続課題を理論的・実証的に強化できる論点及びアプローチを学び、改宗と家計を交錯させた民族誌を作成するのであれば、家族史収集の前に研究課題を再構築することが効率的であると判断するに至ったこと。

及び(3)先行サマ研究者からの助言:平成25年7月にサマ研究の先行研究者Clifford

Sather 博士と H. Arlo Nimmo 博士に報告した折にも社会組織の変化を改宗と関連づけ、性別分業や新たな社会的役割の出現等を調べ、かつ当事者の意味付けを聴くよう助言されたことである。

また、平成 25 年度は米国派遣前に、当時の勤務校から前期授業担当コマ数増や夏休み中の集中講義を命ぜられたため、実質的にフィールドワークに行くことは不可能であった。そのため、当初の研究計画で予定していた本調査ができなかったことをいかに穴埋めするか悩んでいた時期もあるが、「研究計画最終年度前年度応募」の制度により、もっともよい形で継続を許していただけの形となった。

ただし、これは「研究計画最終年度前年度応募」時点ですら予測がつかなかったことであるが、平成 26 年 4 月に現勤務校(東京大学)に転職したことに伴い、在外研修期間が当初の平成 26 年 3 月末から同年 8 月末まで延長された。同年 9 月から実質的に新しい職場で勤務を開始したため、フィールドワークの準備不足を懸念し、同年 4 月時点で、平成 26 年度に本来予定していた現地調査は行わないこととし、代わりに国際学会(とくに、調査対象であるサマ人が分布する島嶼部東南アジアの研究者、あるいはそこを研究する他地域からの研究者が集まるもの)等でのこれまでの成果の報告を行った(以下項目 5 の)。また、平成 27 年度から本格的に再開する現地調査に備えて、過去に収集したライフヒストリーの英訳を進め、公刊されることが決まっている(同)。

なお、平成 25 年は 11 月 8 日に中部フィリピンをスーパー台風ヨランダが襲い、広範囲に甚大な被害が生じた。この地域の共通語であるセブ語話者である筆者は、このときから平成 26 年 3 月までは、京都大学地域情報統合センターの山本博之氏を中心とする緊急研究集会への参加、その報告書の編集と序章書き下ろしの担当、および個別ばらばらに入ってくる支援依頼への対応で多忙を極め、ほかの仕事まで十分に手が回らなかったことも事実である。しかし、この時期に、本研究関連として、キリスト教化直前の調査地の社会経済状況を長老の語りにより伝える ethnographic talk というユニークな形でハーバード大学にて講演を行うことができた(以下項目 5 の)。

また、台風につづき、平成 26 年 4 月 4 日、フィリピン、ダバオ市イスラベルデで火災が発生し、本研究計画が対象としていた調査地も全焼した。これにともない、新たな研究計画(平成 26 年 4 月採択)をも変更をせまられた。同年 4 月、状況把握のた

め、勤務先の個人研究費により 10 日間ほど現地調査を行った。個人研究費で渡航したのは、科研の研究課題に実際にどの程度、関連するような問題が現地で生じているのか事前には把握不可能だったことによる。しかし、結果的には、この訪問は、科研の研究課題にとって予備調査となるものであった。なぜならば、1)火災からの復興支援の担い手は政府ではなく、キリスト教会であり、とくに北米出身の宣教師の活躍が目立った、2)被災者は生活復興の手がかりとして生業の再開を何よりも望んでいた、しかし、3)被災前から現地社会にある問題(文化的少数者であるサマ人と包摂社会との非対称な権力関係)が逆境で露呈する形となり、復興の困難と時間の必要が見て取れたからである(以下項目 5 の で、フィリピン人研究者に予備調査結果を還元した)。

最終年度ではあるが、実質的には中間的な成果の報告は以上である。途中、予測不可能な出来事が重なり、全体として当初の計画どおりには進まなかった部分大きい。しかし、フィールドワークを主要な研究方法にすえている場合、このような事態が生じるのは当然である。求められていることは、当事者の困難に誠実に向き合いつつ、研究者としての自分の責任(研究資金を得ている)を忘れずに応答していくことだと考えることにより、自分自身の研究者としての心構えも変化した。調査対象者にとってより豊かな時間と経験を提供できるような調査をしていきたい。

学術研究としては、「宗教と経済」、「宗教とグローバル開発」、「キリスト教の人類学」という研究分野における先行研究と文献サーベイを通じて対話しながら、より深い形で調査地の人びとの「祈りと仕事」についての実践、実現されている生活水準の客観的指標、およびそれらにたいする当事者の主観的評価を民族誌的手法により探究していくつもりである。(以上)

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

AOYAMA, Waka. 2015. "Living in the City as the Sama-Bajau: A Case Study of Biraiya's Family." *Hakusan jinruigaku (Hakusan Journal of Anthropology)* No. 18. 印刷中、掲載頁未定。査読なし。

AOYAMA, Waka. 2014. "To Become "Christian Bajau": The Sama Dilaut's Conversion to Pentecostal Christianity in Davao City, Philippines.

"Harvard-Yenching Institute Working Paper Series.
<http://www.harvard-yenching.org/feature/s/hyi-working-paper-series-aoyama-waka> 査読なし(*2014年8月、第12回 International Borneo Research Conference で報告を認められたものの、米国査証の問題で米国より出国できず未発表となり、フルペーパーが返却されたため、ワーキングペーパー化した)

AOYAMA, Waka. 2014. "Living in the City as the Sama-Bajau: A Case Study of Guwapo's Family." *Hakusan jinruigaku (Hakusan Journal of Anthropology)* No.17, pp. 31-58. 査読なし。

青山和佳. 2012. 「未来を投企するフィリピン人 国内初の保健協同組合創設者の語りより」『東南アジア研究』第50巻第1号, pp.37-69.査読あり。

AOYAMA, Waka. 2012. "Social Inequality among Sama-Bajau Migrants in Urban Settlements: A Case from Davao City." *Hakusan Jinruigaku (Hakusan Journal of Anthropology)*, 15. pp.1-38. 査読あり。

〔学会発表〕(計1件)

AOYAMA, Waka. 2014. "What Do Disasters Reveal about the Society? : A Case Study of the Fire that Hit the Sama-Bajau Community in Davao City." National Conference on Philippine Studies at National Museum, Manila (Philippines), held on November 12-14, 2014.

その他、口頭報告1件

AOYAMA, Waka. 2014. "The Life and Death of Papa Melbasa: A Prelude to the Christian Conversion of the Sama Dilaut Migrants in Davao City, Philippines, in the late 1990s." Harvard-Yenching Lunch Talk with Professor Theodore Bestor (Harvard University) as a discussant at Harvard-Yenching Library, Cambridge (U.S.A.), held on March 6, 2014.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1)研究代表者 青山和佳
(AOYAMA, Waka)
東京大学・東洋文化研究所・准教授

研究者番号：90334218

(2)研究分担者 該当なし
()

研究者番号：

(3)連携研究者 該当なし
()

研究者番号：

以上